



千葉大学医学部同窓会報 第62号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2015

北村 武教授 久保政次教授 合同退官記念式 挙行

多年にわたって千葉大学評議員および医学部附属病院長などの要職を歴任され、本学の運営、発展に尽力された耳鼻咽喉科学北村武教授、小児科学久保政次教授の退官記念式典は桜花咲き綻ぶ快晴の三月二十六日(土)午後一時半から医学部記念講堂で盛大に挙行された。

明治生れの気骨溢れる両教授をお送り申し上げるため参集された諸先輩、学内外の来賓の方々には三〇〇名を越え、惜別の情漂うなかで堀越教授司会のもと、横川医学部長の挨拶、香月学長、大塚あのはな会長の祝辞、教室の謝辞、記念品、花束贈呈などがあつて、最後に両教授の回想をまぜたユーモラスな御挨拶が参集者の心を打った。

千葉医学会総会開かる

— 五月七日 —

昭和52年度の千葉医学会総会(事務総会)は五月七日(土)午後三時三十分より記念講堂において行なわれた。議事終了後昨年度の形式と同様にカクテルパーティーがなごやかに開催されたがやはりもう少し出席者が多かった。かつ

次に本間教授の司会で日本学術会議第2部副部長、現中央大学商学部教授岡倉古志郎先生の「科学者憲章について」と題する記念講演が行なわれた。岡倉先生は岡倉天心のお孫さんに当り、久保教授とは旧制千葉中の同級生、北村教授とは学術会議会員として、また北村教授の手術を受けられた関係で、両教授とは昵懇の間柄であり現在学術会議で検討中の科学者憲章の内容を分り易く解説され、聴衆を魅了された。

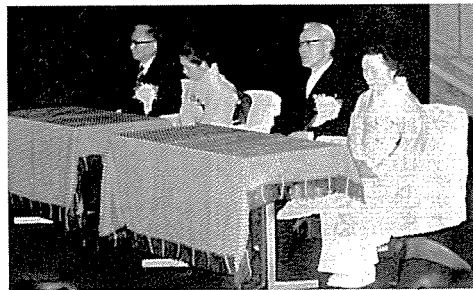
終って岡本教授の司会で祝賀会に移り、佐藤博附属病院長の挨拶、桑田教授の乾杯、豊田文一金沢大学長、若生宏若手医大教授、耳鼻咽喉科学教室同門鈴木孝輔先生、小児科学教室同門内田佐造先生などの祝辞があり、和氣藹々の談

脳研第二部門に 神経内科を

永らく要求を続けていた医学部脳機能研究施設の第二部門は、文部省からの正式通知のあり次第、第一臨床研究部(神経内科)として発足する予定である。

合のち、両教授への感謝と今後の御健康、御発展を祈念しつつ全行事の幕を閉じた。

なお医学部主催の記念行事終了後、両教室同門主催の合同祝賀パーティーが千葉駅前「そごう」デパートで開催されたが、これも三〇〇名を遥かに越えた参会者があつて極めて盛会であつた。



右側 久保教授御夫妻
左側 北村教授御夫妻

この研究部では主として公害病や難病などに対し、神経内科学的に、その適確な診断方法の確立について研究するとともに、傷害よりの修復等につき実地に診療を行ない、神経内科専門医の育成につとめることとなる。



きわめて和やかに 卒業証書伝達式 行なわる

新入会員歓迎会

春寒の雨がありがたかった三月二十三日午前十一時半、医学部記念講堂内で、昭和五十二年卒業生証書の伝達式が行なわれた。例年と異なり、すでに筒に入った証書が呼称とともに、医学部長から手渡されたが、事務のトチリに笑聲が湧く程、リラックスした伝達式であつた。

学部長の挨拶は「医師としての歩みはふつうの人と異なつてむずかしく、今諸君を送り出す私としては不安と安心の入り混つた気持ちである。卒業後は自分自身が求めて行なうものであり、道を開くのに甘えや誤りはゆるめられない。これからは何によらず、己の手で学び取るという態度で進んで欲しい」と、柔らかな言葉ながら厳しい内容のものであつた。

式後、講堂前広場で記念撮影。つづいてホワイエでの、るのほな同窓会新入会員歓迎会に移る。司会の井出常任理事に促されて、まず大塚会長は、るのほな同窓会の発展とまで行かなくとも、育成に協力して欲しいと新会員に要請、鈴木名誉会長の音頭で乾盃。ビールの満を引き、オードブル、サン

ドウィッチに手が伸びた所で、厚生省の山中科学審議官からの祝辞と、厚生技官への勧誘があつた。井出常任理事の軽妙な司会によって、以後、教官、卒業生入りま

急告

耳鼻咽喉科教授に
金子敏郎氏決る

北村教授退官のあとを受けるべき教授選考がすすめられて来たが五月九日教授会にて最終の審議があり投票が行なわれた結果、金子敏郎氏(現・助教授・本学昭28卒)が後任教授に内定し、近く発令をみるこゝとなつた。同氏はるのほな同窓会報編集委員の一人でもある。

なお、小児科の後任教授も五月中に選考を終る予定であるので新任の二教授についての詳細は次号に掲載する予定である。

東京ゐのはな会新年会の記

昭和五十二年の新春を迎えて、東京ゐのはな会の恒例の新年会が一月二十九日銀座東急ホテルにおいて開催された。

大学からは香月学長、相模前学長、佐藤神経精神科教授がみえられ、又、大塚同窓会会長、小林副会長も来会された。又、本年は、関東一円の同窓会との結合を強調にしたいという、嶋田東京ゐのはな会会長の念願に基いて、関東各県の同窓会に呼びかけ、会長のほか何名かの会員の方々の御参会を願いたい旨連絡したところ、内山信会長（群馬）、小林金市会長（千葉）、上川名誠（会長・埼玉）の御来会あり、中山立三（会長・茨城）も御出席の御返事を頂いたのだが、当日急用のため御出席願えなかったのは残念なことであった。しかし、在京の会員五十名の出席に加へ、多くのお客様を迎えて賑やかな新年会となった。まづ、嶋田会長の開会の挨拶に始まり、その挨拶のなかで、東京ゐのはな会の盛大な発展と会員の団結をはかるための手段として色々事業を計画したいのだが、なかなか妙案がない、会員からの意見をよせられたい旨を述べられたが、昨年は事業の一環として、在京の美術同好の会員からの申出があつて、美術展を協賛開催したところ、東京在住の会員ばかりでなく近県の会員からの作品も多数出品され、盛大な展覧会となったことを話されたが、今

後身は生物活性研究所の育成、発展に力をつくしたいつもりであるが、同時に、これからは同窓会の一員としておつき会い願いたいとなごやかに御挨拶された。つづいて、内山、小林各会長の御挨拶のあと、上川名会長よりは、来る参議院選挙について埼玉県の活動の状況を述べられ、千葉の同窓会も絶大な支援を乞う旨の御挨拶があった。そのあと、佐藤保雄先生の音頭で、東京ゐのはな会の発展と会員の隆昌を祝して、乾杯があつて祝宴に移り、先輩後輩、又、同期生と、和気藹々のうちに歓を尽くしたが、会場の時間的制約もあつて、まだ飲み足りない、話足りない気持ちを抱きつつも、午後七時過ぎ、目度く新年の祝宴を閉ぢました。

東京ゐのはな会も、昨今は会員千名になんなんとする大世帯となりましたが、新年会にも総会にも出席される会員の数が、まことに少い憾があり、当事者としては、いつも残念に思いつつ、色々心を砕いている次第であるが、なかなか思うにまかせない現況である。同窓会の集いには、もう少し、関心をもつて頂いて、多数の会員の御参加を切願して、この記事を終わります。（久保田正助記）

安房ゐのはな同窓会開かる

昭和51年11月11日午後五時より鴨川市吉田屋旅館にて、本部より香月秀雄学長を招いて開催された。

最近の学内事情について報告があり、地元からは穂坂与明・橋本鐘爾・佐久間安雄先生等多数参加し盛会であった。なお大塚文郎同窓会長も出席の予定であつたが急病でお出願えなかったのは残念であつた。（幹事小谷庸）



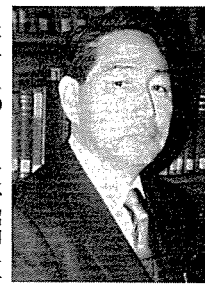
故河合直次先生の三回忌開催さる

昭和52年2月19日（土）東京・品川駅前パシフィックホテルにおいて、河合先生の三回忌と先般逝去された鉄子未亡人の四十九日忌が開催された。この会は内輪の会で先生御一家と生前特に縁の深かつた方ならびに第一外科同門会の有志約五十人程集まり、故人の遺徳を偲んだ。香月秀雄学長・安井修平先生・石館守三先生の感銘深い思い出話、スライドによる珍しい写真、文書などの披露もあり、

国立千葉病院長に

齊藤弘先生昇任

（昭21卒・ゐのはな同窓会編集委員）



大正11年10月の生れ、昭和21年本学卒。第一外科に在籍ののち、鈴木五郎先生が国立千葉病院長として本学教授を兼ねて赴任されたのに伴ない、同病院に勤務、以来一貫して今日に至つた。その間、外科学の手ほどきを受け、後に整形外科に転じ、生粋の国立病院育ちである。

国立病院として地域医療に対する役割を良く認識して、特色がないことを特色とする病院、即ち、満遍無く高度の診療内容を持ち、要求に答へ得る病院となることを心掛けて行きたい。尚、教育研修病院として活動しているが、最近強く要求されて来ている関連学科についても広い知識を有する医師の養成については、早くから口テイトシステムを採用し成果をあげている。大学の教室との連携を拡大、緊密化することを希望している。大学の諸賢の御理解、御援助を切望いたします。（齊藤弘）

厳肅のなかにもなごやかな雰囲気のある集りであった。故人の御冥福を祈ります。

UNDERSTANDING THE STRETCH REFLEX
(Progress in Brain Research Vol.44)
ed. by S.Homma
(ELSEVIER Scientific Publishing Co.1976)

本書は昨昭和51年11月に本間三郎教授が主催された国際シンポジウムの発表をまとめたものである。運動生理学の基本的要素である筋紡錘に関する構造と機能、脊髄反射機構への関与といった問題ばかりでなく、伸展反射に対する脳からのコントロールに関する研究も数多くとりあげられている。伸展反射を通して運動制御機構を理解しようとするための最もあたらしい研究成果として一読に値する。ノーベル賞受賞者グラニツト教授をはじめすぐれた外国人研究者を東京に集めてこのシンポジウムを開催した本間教授の意図の底には、本学の百年祭行事への学問的参加があつたであろう。（定価二二、〇〇〇円（U&M））

肺癌研究施設に

山口豊教授新任

学長になられた香月教授の後任として同教室の助教であった山口豊氏(本学昭31卒)の昇任がきまり四月一日付発令となった。山口教授はその抱負を次の如く述べていらる。

このたびはからずも香月秀雄教授の学長就任に伴い、後任として肺癌研究施設第一臨床研究部門の担当を拝命いたしました。肺癌という一つの臓器癌を名称に冠した異色な研究施設は世界にもなく、当研究施設はまた日本の肺癌研究



得ません。この教室の明日の発展のため粉骨砕身努力する所存でございますが、諸先輩はじめ各位の御支援、御指導、御鞭撻を切にお願いする次第でございます。
山口 豊

を推進する代表的な施設でもあります。その第一臨床研究部門を引き継ぎますことは身に余る光栄ではありますが、私に課せられた責務の重さを考えますと、自身の浅学非才であることを痛感せざるを

系統解剖用死体収集の現況

嶋田 裕
(第一解剖・教授)

解剖学は医学の習得にとって重要であることは、今更のべる必要はない。その習得のために学生は肉眼解剖学実習を行っているが、その教材として遺体を必要としている。現在学生一名あたり1人体(○・五体)が文部省の示す基準であるが、この基準に達していない大学が少なくない。

系統解剖に供する遺体は、黙って自然に集まってくるものではなく、絶えざる啓蒙運動が重要である。本学では解剖学の教官は古くからこれに熱を入れており、

また事務部門の協力により、○・五体の基準に達していた。最近二、三年の収集状況を記すと、昭和四十八年度には五十四体、四十九年度には五十八体、五十年年度には四十五体であり、これから先数年は、年間四十から五十体の間になるのではないかとと思われる(これだけ集まっても中には遺族の承諾が得られなかったり、また死後、固定処置前にかなり日時が経過していたときは、保存が良好でない場合があり、全部が使用できるとは限らない)。本学部では昨年ま

で、学部一年の学生数は百名であったが、本年度から百二十名になり、昨年度までは○・五体で実習を行っていたが、今年は○・四体で行わざるを得なくなった。

近年各大学では学生の定員増が行なわれ、また医科大学の増設が続く、全国的にさらに多くの遺体を必要とするようになってきた。それに反して社会環境その他の事情によって、遺体の収集は著しく困難になってきている。幸い生前に自分の遺体を学生の教育に使ってもらいたいという理解ある篤志家(白菊会会員)が漸次増えつつには至っていない。

そのためには解剖学には死体収集という特殊な事情が付随している(勿論収集、処置には大変な経費と労力がかかっている)。良い

相川和之、青木満、秋山純子、安藤稔、井合洋、石井隆之、石井弘、石原弘行、板沢正明、市川健司、井上淳一、井上高志、今関英男、岩立康男、大西正記、大野博司、大村昌夫、大和田哲郎、岡田祐子、奥畑好孝、尾崎正時、加藤雄一、景山雄介、河内康英、岸幹夫、熊沢亮一、倉沢和宏、剣持敏、小宮山伸之、高政文、今田進、後藤茂正、佐藤好範、蔡篤俊、坂本真紀子、崎山八郎、始岡吉生、清水耕、重原岳雄、品田良之、柴田晃一、嶋勇吉、嶋崎勝典、鈴木俊英、瀬戸一彦、岡谷雄一、田ヶ原弦、田島和幸、田中泰弘、高木一也、瀧口裕一、竹内明男、竹本直、丹野裕和、筑摩明彦、筑藤玲子、辻村瑞江、寺師裕彦、東條雅季、富山三雄、巴雅弘、豊崎哲也、豊永直人、中川宏治、中郡聡夫、中島弘道、中塚俊明、中村こずえ、中村實、中谷充、長門義宣、西島好章、西村元伸、庭山博行、野田文

昭和52年度 医学部入学者

(一一九名)

医療、すぐれた医学を後世に残すためにも、解剖学教育のレベルダウンはさせるべきでない。この稿を編集部から依頼されたのを機会に、同意諸兄の御理解をいただき、学生実習に適するような例があったら、一例でも二例でもよいから協力していただきたいと思う。また、機会があれば折にふれて啓蒙もしていただきたいと思う。これに関連し、日本解剖学会では、

このような重要な収集業務は特定の教室あるいは事務部門が片手間に行うのではなく、それに専念する部門(解剖体収集部門)を設置すべきであることを昭和四十九年度より文部省に要望している。本学部でもそれに合わせて概算要求でその設置を要望し続けている。その早期の実現が切に期待される。

隆、野本実、林富貴雄、原信行、日野剛、百武衆一、武城英明、深沢毅、藤里正視、藤田良一、星誠一郎、星岡明、星野明子、星野和彦、細田和彦、堀誠司、丸山浩、三浦良夫、三上直登、三上真、三村雅也、光永伸一郎、南敏実、宮副一郎、武藤博、村上直人、村山耕一郎、森聖二郎、森田昌男、山崎正志、山崎俊司、山下純男、山本修一、山本司、横内敬二、吉川信夫、依光一之、石井信行、石川信泰、大谷地直樹、福原次成、遠藤正人、本田明、和田祐一、近藤克則。

鈴木正天名誉教授、
インシト古来医学を翻
訳

シヴ・シャルマが一九二九年に著わした「アーユルヴェーダの体系」を鈴木名誉教授が日本語に訳され、阪大医学部衛生学教室より出ている「アーユルヴェーダ研究6号」(昭51年12月)に百余頁にわたって掲載された。途中御入院のことなどありながら完成された御努力にはひたすら感服の他ない。

四葉会・卒業30 年記念誌出る

一年前のことになったが、医専昭20卒の皆さんが、思い出や現況を写真、家族構成を含めて美事な会誌をまとめた。冒頭の大学をめぐる写真は貴重な資料ともなっている。編集委員長は末永直光先生(電話〇四五一四〇一一五二九)である。

編集後記

記事が多く、編集後記のためのスペースがないという嬉しい悲鳴が編集後記です。多くの記事を限られた紙面にのせるために、ニュースはなるべく短かく要点をお知らせ願います。また宛名に必ず「編集部」と入れて下さい。
(村山)